

みおしえ



こころの良薬



南無阿弥陀仏
市川陽山謹子



せん ちやく ほん がん 選択本願の念仏

専稱寺 鯖戸哲雄

私たちが、毎日の生活を営む中で、實際信仰に入ろうとする場合、まず心の準備として、菩提寺に行つて仏教の話を拝聴するとか、信仰の書を図書館に行つて拝読するとか、お施餓鬼会・お十夜等の法要に参加します。と言つても、仏教には八万四千の法門があるとと言われるように、目的すなわち、行き着くところはたとえ同じであつたとしても、その方法には幾通りもの道があります。

しかし、教えの中には自分自身の力によつて難しい修行を経なければ覺りを得られないものもあれば、お念仏のように阿弥陀様のお力に救われて、お浄土に往生生まれ、そこでみほとけのお力添えを頂き、覺りを得るものもあります。これらを、聖道門とか浄土門、難行道とか易行道と言つておりますが、聖道門（難行道）は、ちょうど人が歩いて険しい山道を行くのに似ています。これに対して浄土門（易行道）は、船に乗つて易々と目的地に行くのに似ていて極めて修行し易い法門であります。

修行し易いといっても、阿弥陀様のお浄土に往生する為

に、ただちに結びつく行と往生に結びつき難い行があります。法然上人は前者を正行といい、これ以外の行は雑行として、お浄土を願う人は雑行を捨てて、もつぱら正行を努めなければならぬとおっしゃっています。

正行の中には、阿弥陀様のお浄土に関する教典を読む場合もあれば、阿弥陀様とそのお浄土を心に想い目のあたりにする場合もあれば、また阿弥陀様を礼拝し、御名を称え、心を尽くして讚え供養する方法もあります。これらはそれぞれ尊いおこない、行であります。その中でも阿弥陀様の御名を「南無阿弥陀仏」とお称えするお念仏（称名正行）は、阿弥陀様が、どのような人でも心から南無阿弥陀仏と称えるならば必ず往生させましよう、と誓われた本願の行でもあることから、正定の業と名づけられております。

法然上人は、私たちは数多くの教えの中で、あれこれと手を出しているうちに、結局全て中途半端なものになってしまい、目的を貫徹することもおぼつかなくなるので、気を散らすことの無いように、ただ一つの道を選ぶことをなされたのです。

すなわち、「南無阿弥陀仏」とお称えするお念仏は、阿弥陀様によつて選ばれた本願の行であるから、選択本願の念仏というのであります。

仏の心になろう

廓信寺 淤見善雄

八月下旬、九州で、保険金目当てで息子を殺した母親が逮捕されました。その息子は、とても良い青年であり、本人には何も問題は無かったのに、親の一方的な理由のために、短い一生を終えることになってしまいました。

このような事件はここ数年、珍しくも何ともない状況です。子供が子供を死に追いやる、子供が親を殺し、親が子供を虐待する等、理由はどうであれ、このような残酷なニュースは、毎日のように報道されています。

一視聴者としては、他人事として見てしまえますが、しかしそれではいけません。なぜならば私たち全員が、殺人や虐待をする可能性を常に持っているからです。たとえ殺さなくても、人を憎んだり恨んだりする悪い心は、誰もが持っているのです。ただそれが何かのきっかけで爆発するかもしれないかの違いに過ぎないのです。

だから、その悪い心を消滅させてしまえば良いのでしょうか、それは人間である限り不可能に近いのです。私達人間について法然上人は、

このごろのわれらは、知恵のまなこしめて、行法のあしなえたるともがら也（しるて器官の働きを失う意）とおっしゃっています。その本質は、誰もが同じなのです。ではどうするべきなのでしょう？法然上人はひたすら「南無阿弥陀仏」とお称えしなさいと多くの人に説いています。

いそぎで彼の極楽浄土に生まれて、彼の国にして仏道を行ずる也

とおっしゃっています。私たちは浄土に生まれた後、仏道を行じて「完全に悪い心を持たない存在」になるのです。

そうは言っても、では現在の私達は、南無阿弥陀仏とお称えするだけで良いのでしょうか。法然上人は、

悪をあらためて善人となりて念仏せん人は、ほとけの御心になふべし（せん自発的に物事を行うの意）

とおっしゃっています。阿弥陀様は、愚かな私たちを慈悲の心で浄土に迎えてくださるのですから、少しでも良い人間になって、その仏様の慈悲の心に報いるべきなのです。私たちはこの世では「悪い心」を完全に消すことは出来ませんが「南無阿弥陀仏」とお称えする生活の中で、少しでも良い人間になろうと努力すべきなのです。

四 苦 八 苦

「原稿を書くのに四苦八苦しちゃったよ」毎回そんな声が聞こえてきますが、わたしたちは生きていく上で多くの苦しみに飲み込まれます。インドではこれらの苦しみを、三苦、四苦、八苦、十六苦、百十苦等と分類しています。

仏教では人が生きていく上で避けられない基本的な苦しみの生・老・病・死を四苦。また生きていく上で味合わなくてはならない精神的な苦しみの愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦の四つを加えて八苦と言います。愛別離苦（あいべつりく）とは愛する人や物事とは必ず別れがあるという苦しみ。怨憎会苦（おんぞうえく）とは嫌な人や物事に会わなければならない苦しみ。求不得苦（ぐふとくく）とは欲しいものは思うように手に入らない苦しみ。五陰盛苦（ごおんじょうく）とは人の感覚や体の働きが盛んになるほど苦しみも多くなるという意味です。

どなたでも思い当たる節があるのは、この四苦八苦がわたしたちの真の姿を的確に捉えているからです。お釈迦さまはこの苦しみをどうしたら乗り越えられるかと深くお考えになり出家される動機とされたのです。

【編集後記】

◆ 今回は、鯖戸・淤見両上人に執筆の腕を振るって戴いた。改めて感謝申し上げたい。

◆ 平素から気を付けていても病気になってしまうことはある。医者は病気の程度と患者の具合に応じて処方箋を書き、我々は薬を貰い服用して病気を治療する。これに対して心が荒み病んでしまった時には、誰が処方箋を書いて薬をくれるのであろうか。

お二人の話からもわかるように、その薬は南無阿弥陀仏のお念仏である。処方箋を書いてくれるのは、阿弥陀様であり法然上人であり僧侶であり仲間であり自分自身なのである。まずは何より自らの心が病んでいることを自覚することが大切である。薬の用意はすでに万全である。心配はない。

〒三六五〇〇三八

埼玉県鴻巣市本町八の二の三二 勝願寺内

『みおしえ』編集室 代表 藤田俊彦